
桜散るころに 【下】

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜散るころに 【下】

【Nコード】

N76340

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

昭和初期の恋愛小説を目指しました。悲恋です。

（前書き）

昭和初期の恋愛小説を目指しました。学校制度がよく解っていませんが、そこはあまり突っ込まないで頂けると…！（とりあえず男子は17～20が高等学校生、それ以上が大学生ということで…。女子は17以上が高等師範学生。大正8年より前の学校制度資料を参考にさせていただきました）悲恋です。 タイトルにもあるようにこちらは「下」ですので「上」からお読みになることをお勧めいたします。

一方的な別れから約半月、清は屍のように生きた。
賢治と千代子も引き裂かれてしまうのだろうか、と余計な心配をし
ながら、屍のように生きた。

桜散るころに 下

また秋がやってきたな、と僕は紅葉の木を見ながら目を細めた。温
かな風が頬を撫で、どこか別のところへ踊り去って行く。何もかも
が新しく色づくこの季節なのに、僕はといえば今までの人生の中で
一番落ち込んでいた。枯れてしまっていた。

あの日から僕は土手を通るのを避けていた。一方的に別れを告げ、
彼女の言い分など聞かずに走って家に帰ったあの日。僕が何を思っ
て彼女にあんなことを言ったのかを彼女自身はきつと知らない。ず
っと、気が付かなければいいのに。そう思いながら、今日も土手を
避けて違う道から家へと帰る。

土手を歩かないで帰ると商店街を通ることになる。今日も活気ある
この町は、いつか僕の「帰りたくても帰れない場所」になるのだろ
うか、と考える。見るものすべてが惜しくなった。文学が好きな自
分を、怨んだ。大好きだった漱石の本ももう読まなくなってしまい、
僕はただただ毎日機械的に学校に通うことしかできなかった。

ふと、遠くに誰かがいるのに気が付いた。長い髪の女の子で、じっ
ところちらを見ている。隣にはその子より少し背の高い男が並んで立

っている。僕は目を凝らしながら男を見、その隣の女の子を見る。そして、それが千代子さんだと僕が気が付く前に、彼女の方から駆け寄ってきた。女学校を出た彼女はもう三つ編みをしていないので容易に判別できなかったのだ。

「千代子さん……」

「やっと、やっと見つけた。土手の方にいつまでたっても来ないから……。私ずっと待ってたんですよ、清さんのこと、ずっと。毎日です」

「もう会わないって言ったじゃないですか」

「それはあなたの勝手な言い分に過ぎないです」

彼女は怒った口調でそういうと、僕の手を掴んで僕が今来た道に戻りだした。

ああ、今度は君が引っ張ってくれるのか、と半年前のことを思い出した僕は空いている方の手で帽子のツバをおろした。

彼女がつれてきたのは、予想通りいつもの土手だった。

「久しぶりですね、ここで話をするのは」

「……」

彼女の長い髪が風でなびいているのに僕は見とれる。

「どうしていきなり居なくなってしまうれたんですか。理由があったのでしょうか？」

「理由なんて、特にないですよ」

「嘘を吐いたって駄目です。教えてくれるまで帰しませんよ！」

彼女はそういつて声を荒げた。

千代子さんの怒った姿を見たのは初めてかもしれない、と思いながら、僕はこぶしを強く握る。

「賢治さんは……」

「？」

「賢治さんは、今……?」

「大学に通っています。もう少しで卒業するみたいですけど……。居なくなったことと賢治さんが何か関係してるのですか？」

千代子さんの質問を無視して僕は続ける。

「何を、何を学んでいる方なんですか？ 婚約は！ 婚約はどうなってるんですか！」

「清さん……？」

思わず感情的になって声を大きくしてしまったのを恥じて僕は帽子のつばをおろす。

この癖の意味することを知っている千代子さんは、静かに口を開いた。

「賢治さんは医学生です。私の婚約者であることも、依然として……変わりありません」

それを聞いて、自分の体のありとあらゆる力がずっと抜けていくのがわかった。

千代子さんは時期に婚礼の式を挙げるだろう。医学生とだ。

僕の心にずっと引っかかっていた不安が、一気に解消されていく。

千代子さんは、医学生と、幸せになれる。

「今度は清さんの番です。私だって質問に答えたんですから、ちゃんと正直に答えてくださいね」

僕を自己満足させて返すまいと千代子さんは僕の左腕をしっかりと掴んだ。

正直に言うと、若干痛い。

「いやです、と言ったら？」

「腕を引き抜いてあげましょう」

そう言って強気な笑顔を見せた彼女ほど、愛しいと思ったものはないかった。

そして同時にそれほどの笑顔を僕の一言で消し去ってしまうのが、とても恐ろしくなった。

「ただの、学徒出陣だよ」

そう言いながら立ち去った僕だったが、すれ違い様の彼女の顔を見て、やはり言わなければよかったとひどく後悔した。

学徒出陣のための徴兵の話を初めて聞いたのは、彼女が婚約者の存在を覚えてくれた次の日だった。文系の学生は結核にでもなっていない限り検査をして合格とみなされるのであろう、と考えていたが本当にそうだった。淡々と事は進み、気が付けば僕は軍人になるための訓練を毎日受けていた。国のために戦うことはもう当たり前前の事だったので、今更後悔などなかったが、ただ一つ気になったのは千代子さんの婚約者までもが徴兵されていないかという事だった。だから今日彼が医学部だったと知って、本当に胸をなでおろした。

深夜。戸をたたく音で目が覚めた。僕は裸足のまま玄関に行く鍵を開け、ガラガラと戸を開いた。そこに立っていたのは、千代子さんだった。まさか焦って靴も履かずに来たのではと一瞬思ったが、きちんと履いていたのでほっと一息ついた。

「どうしたのですか」

やはり話をしに移動した先はいつもの土手だった。

ここ以外で話をするのは落ち着かないというか、慣れないというか。千代子さんはずっと下を向いたまま僕の顔を見ようとしなない。

「……今」

「？」

「……今ここで貴方の右足の骨を折ったら、行かないでくれますか？」

「え？」

「水をかけて痛めつけて結核にでもしたら行かないでくれますか？」

「地に頭をつけて行かないでって叫んだらここにいてくれますか？」

「軍の長に頼み込めば行かないでいてくれますか？」

千代子さんの頬を透明な滴が伝う。

僕は焦り気味に頭を搔くと、帽子のツバを下げるしぐさをしたが、帽子など被っていないかった。

「僕は、どうしたって行きますよ、国のためにこの命尽きるまで戦うんです」

「嫌です」

「わがまま言わないでください。これは名誉な事なんです。笑って送り出してください」

「嫌です」

「もう決まったことなんです、君は賢治さんと日本で、僕は海外で戦うんです」

「嫌です」

全く聞く耳を持たない彼女をどうしていいのやらわからず僕は溜息を吐いた。

すると彼女はゆっくりと顔をあげると僕の右手を両手で握って震える唇を開いた。

「賢治さんの事は、前にも言ったように好いています……………実の兄のように」

「え…………？」

「婚約者だから、親同士が決めたことだから口を出さないと決めていたし、本当に結婚するつもりでした。清さんだっていずれもっと素敵な人を見つけられるって解ってたから、だから断ったのに」

「千代子さ…………」

「好きです。誰よりも何よりも」

そう言われ、僕の時間が止まる。今までの思い出が走馬灯のように鮮明に蘇ってくる。

僕らは共に思い合っていたのだと解って、本当に嬉しかった。

けれども、僕はそれを知るのが遅すぎたのだろう。
そしてなんて皮肉なことに、僕が今できる事は、この一言を口にする
ことだけ。

「うん、ありがとう……そして、ごめんなさい」

自分の泣き顔を隠す帽子などないけれど、僕はツバをおろしてその
場を立ち去った。

夜桜が咲いていた気がしたけれど、それは木枯らしに揺れる紅葉が
見せた幻覚だったに違いない。

その後彼女がどうなったのかは知らないが、
今もどこかで三つ編みをして、本を読んでいればいいと思う。

これが僕の、誰に送るわけでもない長い長い遺書。
今日、特攻隊として。僕は綺麗に散ってきます。大好きな本と思い
出を胸に。

（後書き）

終わったー！なんかすごく残念な感じで終わったー！！
とりあえず学徒出陣は仕組みが解らなくて…すごくアレな感じが…。

ここまで読んでくださってありがとうございましたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7634o/>

桜散るころに 【下】

2010年11月23日05時55分発行